

チャレンジする Someone NEWS

～挑戦者の履歴書

第37回

山岸修氏(『現代の眼』ほか編集者・編集長、俳人)

——時代の運動と表現を結びつける挑戦

一般社団法人 洸楓座 代表理事 佐藤建吉

連載

▼「吉田寮タベリング学部」卒

コロナが世間に拡がる。同時に、ウクライナの戦火が私たちの暮らしの中に「戦争」という言葉を生近にしてしまった。8月、6日、9日、15日と、日本の歴史、そして持続可能な未来について考える動機づけを与えてくれる。

▼編集者として活躍

1967年、大学を卒業したが、大手出版社等からは蹴られ、翌年、『現代の眼』の出版社、現代評論社に入社した。以来、1984年、商法改正に伴い同社が解散されるまで、編集業務と、同誌の編集長も経験し退社。毎日新聞社『週刊エコーノミスト』の制作進行に携わるなどした後、友人と編集制作会社(株)人編集制作会社(株)プロジェクトを立ち上げ、企業や官庁の広報出版物の編集に携わった。

▼作家や評論家を輩出

最盛時には発行部数が4〜5万部であったが、最大規模は筑紫哲也氏が編集長の『朝日ジャーナル』で10万部。岩波の『世界』も10万部近く売れていたという。『現代の眼』の投稿者には、赤瀬川原平、松田哲夫、南幸坊、また吉本隆明などの論客がおり、話題と人気を提供した。

▼運動と表現を結びつける媒介としての編集者

『現代の眼』は1960年に創刊、最初の雑誌名は『現代の芽』で、名は『現代の眼』に改題された。『現代の眼』は、国民的なテーマについて、革新系(反代々木系の構造改革派が中心)と保守系の論客が、バランスよく寄稿、形式としてエッセイ、映画評、書評の最後に連載小説がある総合雑誌だった。ちなみに、62年新年号には、岡倉古志郎らの寄稿による「アジア・アフリカ論」、三鬼陽之助、藤原弘達、田中角栄ほか二名による「政界と財界」と銘打った座談会、さらには花田清輝「現代悪人論」、佐野美津男の連載小説「戦後無宿」などの多様となっている。

『現代の眼』のオーナーは大物総会屋として名を馳せた木島力也氏であった。『世界』よりは『文藝春秋』や『中央公論』よりは左寄りの国民的論壇誌、総合誌だった。山岸氏は、70年代には部落関係に関するコラム記事がもて、明治大学の支援サークルに呼び出され、井出操六の直木賞受賞「アトラス伝説」も連載作品であった。ほかに『現代の眼』からデビューした人の中には、鈴木邦男、鎌田慧、猪瀬

▼地域紙の編集協力

『季刊日本主義』が事務所を置く市政会館地下1階の地域紙図書館会議室では、毎月1回、『季刊日本主義』の同人ら数名(ジャーナリスト、編集者、古代史研究者、近代史研究者、国際問題研究者など)が集まり、飲み会+勉強会を開催、如上のテーマや、現下の国際・社会・経済問題について喧々譁々の議論を交わした。

山岸氏は、白陽社解散後、2020年春からは、御茶ノ水の文化通信社「日本地域紙図書館」の後身として継承した「ふるさと新聞ライブラリー」の館長を務めることになった。傍ら、同社の週刊新聞『文化通信』の編集に携わり、地域文化、地域遺産について、山岸氏は、遅滞なきがらこの時代ほど、日本の歴史や、比較文化論について考え、勉強したことがないかと述べている。いま現在、欧米的な「世界基準」で言うところの日本の位置はかなり低くなっているが、それでも、「日本文化」の中に現代人類文明の危機を救うヒントがある、と信じている山岸氏が、今年4月13日、同反戦歌をリメイクして、YouTube

▼音楽と俳句での自己表現

同氏の趣味はアマチュアオーケストラでのヴァイオリン演奏のほか、俳句も吟じていることである。前者は、船橋市で演奏会を行うなどの腕前であったが、昨年夏に難病を発症し左腕が利かなくなると、演奏を諦めている。後者は右腕を使い句作表現が出来る。最近作を掲げる。

▼むすび アンガージュマン

今紹介する山岸修氏は、1942年、長野県長野市に生まれた(6月に80歳を迎えた)。生地は、当時は長野県上水内郡大豆島(まめじま)村と称した。その地は、いま確認すると、昨年筆者と妻は須坂市と長野市をドライブした折りに通ったところである。後述の「鐵の道」イベント企画のために、「長野市オリピック記念アリーナ」の下見をしたが、その辺りが同氏の生地であった。その地から自転車で行った文学部伝説の卒業生として活躍した山岸氏は、卒業論文として『嘔吐』を研究し提出し、その地から自転車で片

この時代、真木修平の筆名で、雑誌や団体発行物に文化評論も執筆。2002年からは『週刊金曜日』の編集・校正に携わった後、元朝日記者・本多勝一氏が主宰する『月刊あれこれ』で編集を行った。さて、『現代の眼』の経験にふれると、同誌は大手の総合雑誌の保守化の中で「学生運動を主体的に取り上げる」ことにより、少意見を尊重する「丸山実編集長時代」の方針に舵を切り、数を拡大していたが、それを支えたのが山岸氏ら編集者であった。

また少数精鋭の編集部から論壇・文壇に多くの人材を輩出した。山岸氏が編集部で机を並べた仲間からは、直木賞作家が2人誕生した。高橋義夫(1991年「狼奉行」で第109回直木賞受賞)と東谷長吉(1998年、「赤目四十八滝心中末」で第119回直木賞受賞)。芥川賞の尾辻克彦(赤瀬川原平)も本誌デビューであった。井出操六の直木賞受賞「アトラス伝説」も連載作品であった。ほかに『現代の眼』からデビューした人の中には、鈴木邦男、鎌田慧、猪瀬

その後、山岸氏は、長沼氏の紹介で、来日中の金大中の警備を担当していた「在日韓国青年同盟(韓青)」の青年らとも交流し、金大中拉致事件発生後には韓国の民主化運動を弾圧する朴政権を批判する韓青の活動家の論説を載せ、支援を行ったのであった。

山岸氏は、遅滞なきがらこの時代ほど、日本の歴史や、比較文化論について考え、勉強したことがないかと述べている。いま現在、欧米的な「世界基準」で言うところの日本の位置はかなり低くなっているが、それでも、「日本文化」の中に現代人類文明の危機を救うヒントがある、と信じている山岸氏が、今年4月13日、同反戦歌をリメイクして、YouTube

山岸氏は、遅滞なきがらこの時代ほど、日本の歴史や、比較文化論について考え、勉強したことがないかと述べている。いま現在、欧米的な「世界基準」で言うところの日本の位置はかなり低くなっているが、それでも、「日本文化」の中に現代人類文明の危機を救うヒントがある、と信じている山岸氏が、今年4月13日、同反戦歌をリメイクして、YouTube

▼反戦歌

詩人・茨木のり子は、平和のために反戦の詩を遺している。「わたしが一番きれいだったとき」「倚りかからず」「四海波静」などがある。筆者が主宰するのり子の詩の朗読と音楽の回(2019年)で、山岸氏の筆名・源淵と為る。それは、表裏を取らないで「も発表さる」となる。

▼「季刊日本主義」の編集

山岸氏は、2003年には、前出の長沼節夫氏の紹介で、日比谷・市政会館に居を構える日本地域紙図書館(館長・菊地幸介氏、島根日日新聞社主・日本地域紙協議会専務)を発行人とする「季刊日本主義」(株)白陽社発行)の編集人となった。さて、『季刊日本主義』というと、名前はアノクノリズムだが、近代日本を形作った明治維新を見直そうという趣旨で刊行された。その中で山岸氏は、薩長討幕派によって倒壊された江戸文化(特に町人文化)のよき可能性(3R(ヘリサイクル・リユース・リデュース)、SDGs、世界水準を凌駕する教育・文化など)の再発見・再検討に傾注した。加えて石田梅岩による「石門心学」も、山岸氏が注目する道徳学である。また、近代の競争・覇権文明に對峙するものとしての縄文文化の再発掘にも目を向けた。

山岸氏は、遅滞なきがらこの時代ほど、日本の歴史や、比較文化論について考え、勉強したことがないかと述べている。いま現在、欧米的な「世界基準」で言うところの日本の位置はかなり低くなっているが、それでも、「日本文化」の中に現代人類文明の危機を救うヒントがある、と信じている山岸氏が、今年4月13日、同反戦歌をリメイクして、YouTube

山岸氏は、遅滞なきがらこの時代ほど、日本の歴史や、比較文化論について考え、勉強したことがないかと述べている。いま現在、欧米的な「世界基準」で言うところの日本の位置はかなり低くなっているが、それでも、「日本文化」の中に現代人類文明の危機を救うヒントがある、と信じている山岸氏が、今年4月13日、同反戦歌をリメイクして、YouTube



山岸修氏近影(2022.4.13)

た文学部伝説の卒業生として活躍した山岸氏は、卒業論文として『嘔吐』を研究し提出し、その地から自転車で片

この時代、真木修平の筆名で、雑誌や団体発行物に文化評論も執筆。2002年からは『週刊金曜日』の編集・校正に携わった後、元朝日記者・本多勝一氏が主宰する『月刊あれこれ』で編集を行った。さて、『現代の眼』の経験にふれると、同誌は大手の総合雑誌の保守化の中で「学生運動を主体的に取り上げる」ことにより、少意見を尊重する「丸山実編集長時代」の方針に舵を切り、数を拡大していたが、それを支えたのが山岸氏ら編集者であった。

また少数精鋭の編集部から論壇・文壇に多くの人材を輩出した。山岸氏が編集部で机を並べた仲間からは、直木賞作家が2人誕生した。高橋義夫(1991年「狼奉行」で第109回直木賞受賞)と東谷長吉(1998年、「赤目四十八滝心中末」で第119回直木賞受賞)。芥川賞の尾辻克彦(赤瀬川原平)も本誌デビューであった。井出操六の直木賞受賞「アトラス伝説」も連載作品であった。ほかに『現代の眼』からデビューした人の中には、鈴木邦男、鎌田慧、猪瀬

その後、山岸氏は、長沼氏の紹介で、来日中の金大中の警備を担当していた「在日韓国青年同盟(韓青)」の青年らとも交流し、金大中拉致事件発生後には韓国の民主化運動を弾圧する朴政権を批判する韓青の活動家の論説を載せ、支援を行ったのであった。

山岸氏は、遅滞なきがらこの時代ほど、日本の歴史や、比較文化論について考え、勉強したことがないかと述べている。いま現在、欧米的な「世界基準」で言うところの日本の位置はかなり低くなっているが、それでも、「日本文化」の中に現代人類文明の危機を救うヒントがある、と信じている山岸氏が、今年4月13日、同反戦歌をリメイクして、YouTube

山岸氏は、遅滞なきがらこの時代ほど、日本の歴史や、比較文化論について考え、勉強したことがないかと述べている。いま現在、欧米的な「世界基準」で言うところの日本の位置はかなり低くなっているが、それでも、「日本文化」の中に現代人類文明の危機を救うヒントがある、と信じている山岸氏が、今年4月13日、同反戦歌をリメイクして、YouTube